複数の世界のいいとこどりをする

キャロライン・ハウ教授インタビュー　聞き手＝芹澤隆道

日本の地域研究について

芹澤隆道（以下、芹澤）　これまであなたはフィリピンやアメリカでインタビューを受けてこられました。今回のインタビューは日本の聴衆に向けた、とりわけ地域研究に携わる多くの若い研究者に読んでいただきたいと思っています。まずは、日本で行われてきた地域研究について、他の国の地域研究と比較した場合、あなたの印象や考え、評価などを教えていただけますか。

キャロライン・ハウ（以下、ハウ）　私はまず、日本の若い地域研究者や学生のみなさんの多くが、少なくとも三つの言語を扱えるトリリンガルであることを伝えたいです。ことわざに「二つの世界の好いとこ取り」（the best of both worlds）というものがありますが、みなさんは少なくとも三つの世界のよいところをとることができるのです。みなさんは日本語で読み書きしていますが、東南アジアの言語（複数の言語を扱える人もいます）を使いこなし、さらに英語やその他の言語能力も持っています。この能力によってみなさんは複数の知的伝統、聴衆と実践者がつくる複数の知的サークル、議論と実践の場、そして知識の貯蔵庫にアクセスすることができます。もうひとつは私たちが、英語至上主義の時代（Anglocene）として特徴づけられ、批判もされている状況、つまり英語で出版することが威信と優位につながり、必然的にその圧力が高まっている時代に地域研究を行っている、ということです。

日本における地域研究の強みは、何十年にもわたって日本の研究者たちが蓄積してきた東南アジアに関する調査・研究の源泉を活用できることです。一般化が許されるならば、日本の地域研究は多くの場合、詳細できめ細かく、長期的なフィールドワークと資料調査に基づいています。純粋な知的好奇心を原動力とした研究を奨励する大学や、東南アジアに地政学的関心と利害関係を強く持つ政府から資金提供を受けています。ですが野心や対象範囲という点では、日本の地域研究は控えめかもしれません。そのため日本発の東南アジア研究は、日本発の中国研究（特に中国史研究）が欧米の中国・ユーラシア研究に与えたようなインパクトや影響力はないかもしれません（例えば、九世紀から一〇世紀にかけての中国の社会経済的変化を理解することに貢献した内藤湖南の学説に相当するものが、日本の東南アジア研究にあると言えるでしょうか？）。しかし、日本や日本を拠点とする研究者たちは、少なくとも三つ（以上）の世界を比較できる優位性を生かしながら、複数の知的伝統や知識を活用して多言語で複数の聴衆に発信してきましたし、英語圏の聴衆だけに限定する必要もありません。もちろん日本における経済学や政治学などの分野が英語圏の学問文化に同化しつつあることや、地域研究の分野

では英語の出版物に比べて日本語の出版物が相対的に減少していることなどは承知しています。それでも多くの言語で書くことができるなら、多くの言語で出版されるべきですし、少なくとも多言語で出版できるというオプションがあってよいはずです。

研究者の人生と仕事

芹澤　私の個人的な心がけではありますが、テキストを読む際に、単に作品そのものだけでなく、研究者の人生にも注意を払うようにしています。それはテキストと研究者の経験は、多かれ少なかれ相互に関連したり、絡み合ったりするものだと考えているからです。あなたは二〇年以上京都に拠点を置き、フィリピンや東南アジアのエスニシティやチャイニーズネス、文学批評、ポピュラーカルチャー、ジェンダーや移民研究など、さまざまなテーマに取り組んでこられました。ご自身の人生と仕事の関係について、どのようにお考えですか？

ハウ　実は、私は作家になりたかったのです。ですが大抵の場合、フィリピン人は小説や短編小説を書いていてもまともな生活ができませんので、必要に迫られて研究者になったのです。

中国系フィリピン人である私は、人種やエスニシティの問題が、フィリピンや東南アジアに暮らす中国系マイノリティの人々の歴史や境遇の変化にどのように関わっているかだけでなく、いわゆる「チャイニーズ問題」[1]がフィリピンのナショナリズムの中でどのように位置づけられ、どのように発展してきたのかということにも興味を持っていました。私は、ナショナリズムの排他的な傾向を警戒していますが、コスモポリタニズムがナショナリズムの対極にあると考えたことはありません。またナショナリズムをより包括的で多元的なものに変えていこうとする試みが無駄だと考えたこともありません。とはいえフィリピンのパスポートを持っている者ならば、国境はやはり存在していますし、人間の移動やコミュニティの範囲には限界があることを、経験上知っています。

私は、ピープルパワー（エドサ革命）によってマルコス独裁政権が崩壊した直後の一九八六年にフィリピン大学ディリマン校に入学し、一九九〇年に卒業しました。卒業後は、フィリピン大学の英語・比較文学科（DECL）で数年間教えていました。私は、フィリピンが政治的、知的な覚醒を経験しながら沸き返っていたこの時代に、学生として、また教員として過ごしました。DECLが一九六〇年代から一九七〇年代初頭にかけて、多くの進歩的な知識人や活動家を育ててきたことはよく知っていました。そして一九九〇年代初頭のDECLの若手教員が読み、皆で議論を交わしていたのもまた、マルクスとエンゲルス、グラムシ、アルチュセール、ベンヤミン、バリバールだけでなく、デリダ、フーコー、バルト、クリステヴァ、シクスー、ドゥルーズとガタリであり、またプラムディヤ・アナンタ・トゥール、魯迅、グギ・ワ・ジオンゴ、川端康成、ナワル・エル・サーダウィ、ガブリエル・ガルシア・マルケス、バガヴァッド・ギーターでした。

このように何でも読んだのは、エドサ革命後のフィリピン研究の特徴を評したヴァージニア・ミララオとシンシア・バウティスタの言葉を借りるならば、「多元主義と収束」という相反する学問的潮流があったからです。[2]理論や方法に関しては、研究者が二極化（体制派と反体制派）する代わりに、議論や討論のための共通基盤を見出すことができるようになり、視点やアプローチの多様性が高まっ

てきたと言えます。確かに、過去三〇年間で最も注目すべき展開は、人文科学分野では必ずしもそうではないのですが、少なくとも社会科学分野では、フィリピン研究の重心が米国からフィリピンに移ったことです。

当初は、博士課程修了後に海外で働くことは考えていませんでしたが、個人的な、それからその他諸々の理由により、京都大学の東南アジア研究センター（現東南アジア地域研究研究所、以下CSEAS）に所属することになりました。自分の関心に

キャロライン・ハウ

従って研究や執筆活動を行うための場所と時間、そして何よりも知的・制度的なサポートを与えてくれたCSEASに深く感謝しています。この二〇年ほどの間に、研究書を執筆する傍ら、小説一冊と短編小説集二冊を出版することもできました。テニュアトラック（終身在職権）や昇進（教授になりました！）、知的流行に左右されることなく、自分のやりたいことができるこのような自由は、世界のどこにもないと思いますし、日本やフィリピン、アメリカなどの他の多くの大学にもないかもしれません。日本に滞在したことで、私は移民研究に興味を持つようになりました。また日本に拠点を置きながらアジアにおける地域研究を広く積極的に推進しようとする研究者コミュニティの一員となる機会も得ました。これは私がフィリピンだけに「絆」を持っているのではなく、日本人の配偶者がおり、日系フィリピノ・チャイニーズのひとり娘を育てていることで、日本にも「絆」を感じていることとも関係しているかもしれません。

物語と歴史の間

芹澤　あなたが作家になりたいと望んでいたことを最初に知ったのは、二〇一九年にコーネル大学で行われたフランク・ゴーレイ記念講義[3]を拝聴したときでした。あなたの小説『死者の写真』（*Recuerdos de Pataya and Other Stories*, University of the Philippines Press, 2015）は、二〇一六年にフィリピン国立図書賞において、英語の短編小説の最優秀図書に贈られるCirilo F. Bautista賞を受賞しました。さらに二〇二一年には、フィリピンの歴史研究の進展に大きく貢献したことが評価され、グラント・グッドマン賞を受賞しておりますね。あなたは自分を歴史家だとは思っていないかもしれませんが、あなたの作品を読めば、誰もがフィリピンの歴史について非常に多くのことを学ぶことができます。さらに、フィリピンの作家と歴史家の足跡をたどれば、この二つの職業の区別は曖昧なことが分かります。ホセ・リサールは、スペイン植民地主義の知られざる歴史を暴くために小説を書きました。テオドロ・アゴンシリョは、フィリピン大学の歴史学部の学部長を務めながら、短編小説や詩を書きました。ニック・ホアキンは小説家ですが、興味深い歴史的エッセイも数多く残しています。彼らはスペイン語にも精通していましたが、スペイン語

芹澤隆道

の historia には歴史と物語の両方の意味があります。彼らは、自らの主張や不満を示す必要性から、意識していたのか無意識的だったのかは分かりませんが、この二つを橋渡ししていたのかもしれません。そしてあなたは彼らと似たような仕事をしていると思いますが、この曖昧さについてどのようにお考えでしょうか。例えばあなたの著作の『チャイニーズ問題』(*The Chinese Question: Ethnicity, Region and Nation in and beyond the Philippines*, Kyoto University Press, Singapore National University Press and Ateneo de Manila University Press, 2014)では、小説や映画、テレビ番組を使って、中国人とフィリピン人(あるいは東南アジア人)の「境界」を問い、ナショナリズムの排他性に対抗していますね。これも両者(歴史と物語)の架け橋に関係しているのでしょうか?

ハウ　ご指摘の通り、歴史と文学の境界線は曖昧です。なぜなら、どちらも物語のスタイルを取っており、歴史家も小説家も自分の作品を発表するためにテキストをどう利用するのか、その戦略を考えなければならないからです。小説家と歴史家は異なる方法で事実を求めているのであって、主な違いは「真実」を語っているかどうかではなく、世界をどのように理解し、世界に対する理解をどのように伝えようとしているかです。私は自分のことを歴史家だとは思っていませんが、調査をしたり、小説を書いたりするうちに、フィリピンや他の国の歴史についてもっと知りたいと思うようになりました。そして今の私は、社会学や政治学の著作よりも(文学批評や理論は言うに及ばず)、歴史学の著作を読む方がはるかに楽しいのです。

また、読んでいて最も楽しいフィクションも、歴史を深く感じさせる作品であるように思います。もちろんそのフィクション自体が歴史小説である必要はなく、ある場所、ある人たち、ある状況、ある出来事をよりよく理解するための鋭い歴史的感覚が埋め込まれている作品です。プラムディヤ・アナンタ・トゥール、ニック・ホアキン、レシル・モハレス(彼は文化史研究者になる前に短編小説家としてキャリアをスタートさせました)たちは、自国の歴史を深く考察しながら、自国史をより大きな世界史の中に位置づけようとしており、その洞察は彼らの作品の中にはっきりと表れていると思います。そして彼らは総じて、美しい文章を書くことができます(私自身、自分の学術的な文章が美しいとは言えません)。歴史家の作品はそれ自体が芸術作品でありえますし、芸術家の作品はそれ自体が歴史の一形態だといえるかもしれません。

マイノリティとして生きること

芹澤　あなたの人生は、さまざまな場所へ移動しながら、常に「マイノリティ」として生きてきたように思います。マニラの中国系フィリピン人の家庭に生まれ、フィリピン人学生としてコーネル大学で修士号と博士号を

取得し、フィリピン人教授として日本で働いてきました。この「マイノリティ」としての経験は、あなたの研究の関心や作品をどのように形づくっているのでしょうか？

ハウ　先ほど名前を挙げたレシル・モハレスが言っていたと記憶していますが、「周縁」という場所は、少なくとも知的な面では良い場所なのです。いわば「外」から物事を見ることができ、内部の人間が考えないような（あるいは問いたくないような）質問をすることができます。もちろん私は、「アウトサイダー」の立場をロマンチックに語る人間ではありません。実存的にも感情的にも、フィリピン、中国本土、アメリカ、日本など、どの国にいても「外国人」として扱われることは非常に生きづらいことであり、疎外感を感じることがあります。同時に、この呪いが恵みになることもあります。その良い例が、フィリピン研究でしょう。フィリピン研究のこれまでの重心の移動は、地政学的、経済的、人口的、制度的な変化の産物であるだけではありません。それはフィリピン研究の学問的な再配置が周縁から提起されたこと、より正確には、周縁部こそが知的な探求と生産の場として積極的に見直されたことに起因しています。長い間、フィリピン研究はフィリピンの外部（とりわけアメリカ合衆国）で担われ、周縁の学問とされてきました。アメリカ研究、スペイン研究、ラテンアメリカ研究、さらにはアジア・アメリカ研究においても、フィリピンは周縁的な存在であっただけでなく、東南アジア研究、アジア研究、マレー研究においても「はみ出し者」とみなされてきました。しかし、近年の研究で明らかになってきたように、問題はフィリピンの周縁性ではなく、知的枠組みの偏狭性によって、研究者たちがフィリピンと世界とのつながりを見ることができなかったことです。

ホーム&フィールド

芹澤　一般的に地域研究は、フィールドに行ってデータを収集し、それをホームに持ち帰って、論文や本を書くという方法によって行われてきました。しかし、あなたの場合、このフィールドとホームの関係はそれほど明確ではなく、固定されたものでもありません。あなたはフィリピン人教授として、フィリピン、中国、東南アジアなどのフィールドに行ってデータを収集し、それを日本に持ち帰って論文や本を書いています。地域研究を行う上でのホームとフィールドの関係について、あなたのお考えをお聞かせくださいますか？

ハウ　東南アジア出身の東南アジア研究者にとって、ホームとフィールドは同じものであることが多いです。ですから実存的な理由であれ、知的な、あるいは制度的な理由であれ、東南アジアを研究しているアメリカや日本の地域研究者たちが保持してきたような外部者性を措定することはできません。

　私は学部で英語学科を専攻し、アメリカ文学、英文学、世界文学を勉強しましたので、すでにある種の地域研究を行っていました。フィリピン人の中には、英語を話して育ち、言語的にも文化的にもアメリカ文化を身近に感じている人たちがいます。私の場合、福建語、タガログ語、セブアノ語が入り混じった言語環境で育ち、英語を学んだのは小学校のときだけでしたが、私が主に書いたり、発表したりする言語は英語です。もう少しニュアンスを変えた言い方をすれば、東南アジア出身の研究者たちは、高等教育、階級、民族、ジェンダー、セクシュアリティ、大都市、言語、都市、国、地域（国内、国外）などのバックグラウンドによって得ることが

できる社会的・文化的資本によって、自国の「国民」や「国」に対して特権的な外部者性を持っていることもあると言えるでしょう。そのためホームで学び、ホームを拠点とする学者であっても、コミュニティや国民はおろか、「自分の民族」を代表して発言することさえできません。

学術的帝国主義

芹澤　二〇年ほど前、マレー人歴史家サイード・フセイン・アラタスは、伝統的な地域研究のアプローチを学術的帝国主義と批判しました。つまり、東南アジアという「フィールド」は、先進国の大学で「製造」される研究の「原材料」を集める場所に過ぎなかったからです。この学術的帝国主義のもとでは、東南アジア出身の研究者たちは、翻訳者、紹介者、仲介者などの二次的な役割を担うことが求められてきました。あなたの経験と仕事から見て、私たちはどのようにしてこの学術的帝国主義を批判的に再検討し、克服することができるでしょうか？

ハウ　今日の状況は、もっと複雑になっていると言えるかもしれません。より多くのフィリピン人がフィリピンの大学で訓練を受けてフィリピンの大学で研究を行っていますし、アメリカ以外の場所で訓練を受け、働いているフィリピン人も増えています。少なくともフィリピン研究の場合、アメリカを拠点とする研究は依然として魅力と威信を放っていますが、より多くのフィリピン人研究者がアメリカ以外の聴衆を対象とすることを選んでもいます。翻訳者／紹介者／仲介者の時代は終わりましたが、東南アジアに出自を持つアメリカ人研究者たちが、アメリカ国内におけるアイデンティティ・ポリティクスの一環として、再び翻訳者／紹介者／仲介者の役割を担いながら、学術的帝国主義を再構築しているのを確認することができます。

私自身の著作出版に関しては、もともとアメリカやイギリスの出版社から刊行することにそれほど興味がありませんでした。それはまず、フィリピン人の読者に向けて執筆するという私の決断を強く後押ししてくれたベネディクト・アンダーソンのような教授の指導を受けたこと、次にCSEASという安全な場所を見つけられたことなどに与っています。最近では白石隆と共同で、「プラザ合意からアジア金融危機までの東アジア地域の形成」という進行中の書籍プロジェクトの一部を、日本の一般読者向けの冊子『究』に連載しました。[4] もちろん学術的帝国主義を批判することは重要であり、現在進行中の、そして大いに必要とされている精神の脱植民地化の一環であると思います。しかし、研究者が検閲を受けたり、翻訳者／紹介者／仲介者の

ニッチに閉じこもったりすることなく、自由闊達に研究に従事できる「安全な場所」をより多く作ることもまた重要であると思います。

アメリカにおける東南アジア研究の衰退と中国における東南アジア研究の勃興

芹澤　アメリカおける東南アジア研究は、冷戦終結後、米国にとって東南アジアという地域が戦略的価値を失ったことにより衰退してきました（言うまでもなく、米国の東南アジア研究の黄金期は、多くの学者が動員され、多額の予算が投入されたベトナム戦争の時代でした）。二〇一〇年代に入り、世界第二位の経済大国となった中国では、東南アジアが重要な経済圏を占めるようになった結果、多くの大学で東南アジア研究プログラムが立ち上げられています。このパターンは、東南アジア研究が地政学的競争の産物であり、強国の経済的利益や投資と並行しながら衰退したり、あるいは発展していることを物語っていると思います。一方、ASEAN諸国は中国の影響力を相対化するために水平的な協力関係を模索しており、東南アジア諸国の多くの大学や研究機関でも近年、東南アジアプログラムが立ち上げられています。アジアで生まれつつある東南アジア研究について、あなたの考えを聞かせてください。また、日本の東南アジア研究は、このように現れ始めた東南アジア研究の新しい局面において、どのような貢献ができるでしょうか。

ハウ　東南アジア研究が東南アジアだけでなく、東アジアでも盛んに行われるようになったのは素晴らしいことです。東南アジア研究がローカライズ（地域化）されるためには、日本はもちろん、中国や韓国などの地政学的、経済的、そして戦略的利益に負うところが多いでしょう。また、東南アジアにおけるASEAN研究の隆盛は、従来の東南アジアとは異なるASEANへの関心の高さと、ASEANという枠組みに関わる問題や関心事（国際関係や貿易関係、制度構築、国境を越えた課題など）を示しています。多中心的かつ地域的、超地域的、グローバルな東南アジア研究こそが明らかに進むべき道だと思います。

もちろん地域研究の状況を、研究機関の数で判断することは、地域研究の実態を正確に把握しているとは言えないのではないかとも考えられます。実際には、アジアにおける多くの研究者たちは、地域研究の専門家であることも、地域研究の研究機関に所属していることも周知されずに、何らかの形で地域研究を行っています。ほとんどの場合、彼らは自分の専門分野の、あるいは専門分野に近い、または学際的・横断的な研究機関で仕事しています。自国を研究する研究者たちは、世界的な知的動向だけでなく、それぞれの地域のニーズや関心に基づいて、自国について研究したり、他国や地域を見たりしています。アメリカと東南アジア、中国と東南アジアという方法論的な二項対立は、それなりに有用ではあると思いますが、東南アジアの現場で起きていることを説明するには明らかに不十分であり、東南アジア諸国が互いに、また世界と深くつながっていることを見落としています。

いわゆるエリア・スタディーズの「エリア」は、伝統的に「私たちではない」（not-us）と定義されてきました。つまり、第二次世界大戦後は、主に「アメリカ合衆国ではない」（not-US）と「英語圏ではない」（non-Anglophone）と定義されてきました。しかし「エリア」を、知的・実践的な関わりがある「（複数の）場」と「ネットワーク」の双方として、より批判的に再定義する方法があると

思います。日本の研究者たちや研究機関は、東南アジア研究を積極的に推進し、東南アジア出身の研究者や研究機関とのネットワークを構築してきました。この意味で、中国や韓国に比べて長い歴史を持っていると言えるでしょう。さらに一つ付け加えておくと、日本の研究者仲間や同僚との会話の中で感じるのは、日本の研究者たちや研究機関が、地域研究の「支配者」になりたいといった考えをもっていないということです。日本の東南アジア研究者は、日本の植民地・帝国時代、戦時中、戦後の歴史を強く意識しており、東南アジアの研究者仲間たちに何をすべきかを指示するのではなく、彼らの現在の努力を支援したいと考えています（このような反中心的な傾向は一方で、ある地域の東南アジア研究の状況が他の地域にも適用できるかのように示唆しながら、地域研究がどこに向かっているかを指摘したり、さらに悪い場合、資金や「正当性」がないために地域研究を完全に放棄してしまうように促したりすることもあります）。

研究者育成について

芹澤　二〇一六年から私はあなたの指導の下でポスドク研究を行ってきました。あなたの惜しみないサポートのおかげで、二〇二〇年にモノグラフを出版することができました。[5] 私は、あなたの指導方法がいかに若手研究者の興味を育み、若手研究者の研究をよりよい形で開花させることができるかを個人的に経験したと思っています。あなたは、このような指導方法をどのように身につけたのでしょうか。かつてあなたが指導を受けた先生たちの影響でしょうか。このインタビューの最後に、地域研究を行っているポスドク研究者と大学院生に対して、何かアドバイスやトレーニング・プログラムを紹介していただけませんか？

ハウ　フィリピン、アメリカ、日本、その他の国で私が指導を受けた恩師たちは、私をひとえにほめて育ててくれました。彼らは、若手研究者と話し合い、若手研究者の研究をみるための時間を割き、その研究を推薦する、売り込むために最善を尽くしてくれました。彼らは研究者育成の達成基準を高く設定しており、私もその基準や期待に応えたいと思ってきました。

CSEASには招へい研究員制度があり、東南アジアやその他の地域から優秀な研究者を定期的に招いています。また、若手研究者を育てるためのポスドク制度も整備しています。これらはいずれも若手研究者を育成する素晴らしいプログラムですが、私は指導や育成という言葉よりも、「友人関係」や「同僚関係」という言葉を使いたいと思っています。なぜなら人々が長年にわたって築いてきたネットワークは同じくらい、あるいはそれ以上に大切だからです。インターネットのおかげで、互いに連絡を取り合ったり、自分の

研究を共有したりすることが容易になりました。私はいつも若い研究者に、自分のアイデアを共有しながら試すことができ、自分の研究に対して率直で建設的な意見を返してくれる、いわば背中を押してくれるような良い友人、クラスメート、同僚が数人いれば、どこで研究しても、どこに住んでいても大丈夫だよと言っています。

（二〇二一年一一月二六日）

――注

1 ハウ教授は、「チャイニーズ」を「中国人」と日本語訳することを避けている。なぜなら「中国人」として訳出すれば、フィリピンや東南アジアで暮らす華僑や華人と呼ばれる中国系移民を除外することになるからである。またチャイナ＝中国（中華人民共和国）であると考えることもできない。なぜならチャイナは、台湾や香港を指す場合もあるからである。ハウ教授は、一国主義的なナショナリズムでは理解することのできないチャイニーズやチャイナが持ってきた多元性やハイブリッド性に着目している。

2 Virginia A. Miralao, "The Philippine Social Sciences in the Balance: Reflections at the Close of the Century," and Cynthia Rose B. Bautista, "The Social Sciences in the Philippines: Reflections on Developments and Prospects," *Philippine Social Sciences in the Life of the Nation*, 344–80, 381–409.

3 Caroline Hau, "For Whom Are Southeast Asian Studies?" presented at the 11th Frank H. Golay Memorial Lecture on Oct. 25, 2019.（https://www.cornell.edu/video/caroline-hau-for-whom-are-southeast-asian-studies, accessed on 14 December 2021）

4 白石隆、ハウ・キャロライン「オンリー・イエスタデイ」『究――ミネルヴァ通信』一〇九号（二〇二〇年四月）―一二八号（二〇二一年一一月）（連載継続中）。

5 Takamichi Serizawa, *Writing History in America's Shadow: Japan, the Philippines, and the Question of Pan-Asianism*, Kyoto CSEAS Series on Asian Studies 21, NUS Press and Kyoto University Press, 2020.